

第4回日本精神科医学会学術大会 2015.10.8-9 (沖縄県)
認知症高齢者における娯乐的作業療法の発動性の短期効果

医療法人 聖志会 渡辺病院 作業療法課
門岡奈月、下村瑠衣、菊池多恵
林田綾、高井静香、松本祥平

- 【はじめに】今回我々は、認知症治療病棟において定期的に行なわれている娯乐的作業療法において、実施前後の発動性への短期効果について、調査、分析したので若干の考察を加えて報告する。
- 【対象】認知症治療病棟に入院中の患者、13名（男性6名、女性7名）、HDS-Rが11点以上、利き手に麻痺がなく、適度なコミュニケーションが維持されている方、平均年齢：81.3歳、平均HDS-R：19.7点、主病名：AD13名
- 【方法】精神科作業療法の未実施日に、SDS、樹木画、カテゴリー別による言葉表出を2時間の間隔を設けて連続2回行なった。次に、別の日に同じ対象者において、精神科作業療法実施前後に同様の評価をした。樹木画は、樹木の大きさ、枝の変化等を勘案して5段階に分類しその変化をみた。言語表出数の変化はt検定、それ以外はWilcoxon符号付順位検定を行なった。
- 【結果】娯乐的作業療法の有無で、SDS、言語表出数、描画テストの変化を調べたところ、SDSの実施の有無における変化は、未実施群0.3、実施群-0.84、(p=0.6)、言語表出数は、それぞれ-0.6、1.3 (p=0.9)、樹木画の変化は、それぞれ-0.15、0.15 (p=0.7)であり、いずれも両群間に有意な差を認めなかった。
- 【考察】今回、娯乐的作業療法の未実施日の2時間後の調査では、若干、SDS点数の増加、言語表出数、描画テスト段階とも低下した。一方、作業療法実施後では、逆に若干のSDS点数の低下、言語表出数、描画テスト段階の増加を認めた。これにより、娯乐的作業療法の認知機能、特に、発動性への有意な短期効果をもたらす可能性が示唆されたが、残念ながら統計的には両群間に有意な差を認めることができなかった。今回、対象者が13例と少なく、今後症例数を増やして検討する必要があると思われた。また、視覚的に用意なVASなども有用な方法ではないかと考えられた。